

駒ヶ岳山上に於ける大惨事

上伊那教育会

あゝ、駒ヶ岳の惨事は、蓋し稀有の惨事であった。八月廿八日黎明飛報は西に東に伝った。忽ちにして警鐘は鳴る消防夫は繰り出す、泣くあり、叫ぶあり、憤るあり、午後には駒ヶ岳及其山麓一帯は、人もて埋められた。其中に呼べは答へんとする様な平和な顔して永き眠に入った可愛らしい小供は、或は負はれ或は棒に結び付けられて順次搬出さる。平素極めて静寂な壮嚴な駒ヶ岳山麓一帯が、忽然修羅場となった。此有様を見たもの、聞いたものが叫ぶのも、憤るのも蓋し無理はない。斯くて日は一日と過ぎて、新聞に雑誌に毀誉褒貶とり／＼の間に、郡村当路者警察官消防夫其他有志者各方面の人々の、夙夜兼行の努力によって今や後始末の方法が、殆んどついて、近く廿七日に赤羽校長以下十一名の村葬儀が挙行せられ様とするに至った。此際に當って此惨事の始終を詳かに調査して、其真相を社会に報告し、邦家将来の教育に資すると共に、殯死者弔慰の法を立てる事は、本郡教育会の任務である事を感じ、委員をあげ調査し其結果を左に録して大方各位の前に呈する事とした。一読の勞を惜むなからん事を切望する次第である。

伊那と駒ヶ岳登山

此山で死んだと云ふものは僅に三四人である。高い割合に危険がない事がわかる。又實際児童も愉快に此登山をなして居る。今日迄伊那の住民の為に、駒ヶ岳の手へた効果は、精神修養上、身體鍛錬上どれ程であったか、固より計る事は出来ないが其多大であったといふ事は疑ない所である。

中箕輪小学校の登山

伊那住民と、駒ヶ岳との関係は前述の通りである。従て中箕輪校も十数年前より、登山を奨励してゐた。殊に十四年以來は殆んど学校の行事として、毎年登山して、教育上少なからざる効果を得て居た。本年も例年登山期とする八月が来た。季節としては上旬がよいが暑中休暇や講習会と思ふやうに行かない。勢ひ下旬になるは已を得ぬ。其処で大体廿六日と定めて正確なところは、其前日に決定する事とした。引率教員は成るべく多勢を望むも他の学年の授業が有る故、そう多く行く事も出来ぬ。殊に本年は、軍籍にあつて演習に召集されたものや、喪中で遠慮する者などあつて、遂に赤羽校長及征矢・清水の両教員が、行く事に決定した。然し引率者としては赤羽校長は数回登山の経験があり、征矢・清水の両氏は軍人で十分鍛へ上げた體である。其に引率者ではないが九名の同窓会員が同行する事として左迄淋しいとも困難とも感じなかった。愈出発の前日二十五日となった。そこで午後高等二年の登山者一同を一室に集め、豫て研究作成せる旅行案によって注意事項を講話した。赤羽校長は

駒ヶ岳は伊那と木曾との間に在る頗る美しい山である。山の頂迄還松を以て被はれて居る、其間に大きな岩がある、雷鳥が飛んで居る。何處ともなく壮嚴で雄大である。山多き我國にも此の如く美しい山は、蓋し稀である。偉人阪本天山先生は大に此山を愛せられ折々一週間から十日間位此山中に遊はれたそうである。先生が此山を如何に見られて居ったかは、先生が此山上の通称「勒銘石」に刻まれている数句がよく之を明らかにして居る。

靈育神駿。高逼天門。畏鎖封域。維岳以尊。

我伊那郷の人々は亦古來此山を愛して、男子は少くとも、一度は此山に登るが常である。吾人の希望は、十四五才以上のものは毎年一回宛は是非上る様にしたと思ふ。駒ヶ岳を青年の公園としたい。伊那から此山へ上るには殆んど費用を要しない。高さが凡そ九千尺以上で、相當に高いが上るに差したる困難を感じない。此附近の村民は、殆んど頂に近い処迄新炭取にいつて居る。従て我が上伊那郡の小学校では既二十数年前より、年々登山するものが極めて多い。今日迄登った小学校児童数は何千人だか数へきれぬ程である。然も今日迄嘗て死者のあつた事がない。否駒ヶ岳開山以來茲に一百年、登山一般の注意につき、征矢教員は山岳に関する語をした。斯くて一同勇躍家に帰り準備を整へ、夜の明けるを待ち遠く思つて床についた。校長は家に帰つて居ると、近所の友人が来る、二人して縁側に出て空を眺めたが、日の入り合ひの具合が宜しい、「やア明日の天氣は大丈夫だぞ」といふて友人に別れ、準備を整へて眠りに入つた。然し校長も今日新聞にあつた天氣豫報の「東海東山は北東の風曇」とあつたのが大分氣にかゝつたらしい。

高等科第二学年男 駒ヶ岳登山修学旅行案

中箕輪尋常高等小学校

- 一、期日 大正二年八月二十六日出発全八月廿七日帰校但雨天順延
- 一、目的地 駒ヶ岳 但伊那町内ノ萱より登山し帰路を権現蔓根に取り西春近小出口に下山すること。

一、登山の目的

一、訓育的方面

1. 至誠奮闘的意志の鍛錬を為すこと。
2. 自治協同的行為の實踐指導をなすこと。

二、智的方面

1. 駒ヶ岳を地理的に觀察せしむる事。
2. 駒ヶ岳頂上より木曾伊那兩谷及眼界の及ぶ限りを觀察せしむることにより郷土の觀念養成に資すること。
3. 土地の高低と植物との關係並に高山植物を實地に採集せしめ

て理科的観念を明瞭ならしむる事。

三、情的方面

1. 無辺偉大、崇高無上なる天地の壯麗美に接せしめて敬虔心の養成に資す。

2. 教師朋友と苦樂を共にする点よりして、社会的犠牲的精神、同情的仁愛的精神の養成に資す。

四、身體的方面

1. 強行遠足により身体を鍛錬陶冶する事。

2. 高山跋涉溪谷探險の方法に熟せしむる事。

一、準備

一、児童一般各人の準備

1. 服装

イ、股引、脚絆、草鞋の輕装を為す事。着物は袴の事。

ロ、雨具として「ゴザ」(合羽)麦藁帽子(笠)を用意する事。

ハ、防寒用として真綿五枚、冬シャツ一枚を用意する事。

ニ、草鞋は、はき居るものゝ外に二足を携帯する事。

ホ、金剛杖(普通の杖にて可)を用意する事。

2. 食料

イ、食料は六食分を用意する事、但登山する時は一食といふ

も、普通の一食よりも多きものなれば注意すべし。

ロ、食料としては餅は最も可なり、握飯ならば其内に梅干を

1. 征矢先生を先頭に立て、清水先生は殿後し、校長先生は中間に立ち、児童は一列となり、同行の青年は児童の所々に加はりて進むの隊形を取るにより之を覚へ居る事。

2. 児童は身長短きものを前方とし順次身長長きものを後とする

事を心得居る事。

3. 便する時も、植物を採る時も、如何なる時も教師に告ぐる事なしに列外に出づるを許さざる事。

4. 至誠奮闘、みだりに人に依頼せざると同時に、自治協同よく人を助けやるの考を以て此の行を成功せしむべき事。

5. 自己の携帯品は如何なる場所に置くにも必ず自分にて所持し之を人に渡さざる事。

6. 休みたる際は立ちたる跡を必ず顧みる事。

7. 如何なる場合にも鈴の聞ゆる範囲に居らざるべからず、鈴の聞えざる様の事あらば既に危険なるなり、要は列を離れざるにあり。

8. 高山は霧の俄に出づる事あるにより、其時には細引を出して、各人にて繋り合つて行進するにより其心得ある事。

一、実地指導案

1. 日程

一、出発 午前五時学校出発、内ノ萱に向ふ。学校より内ノ萱までの行程約三里、中途一二個所に休憩して、午前九時内ノ

入れて防腐する事、味噌漬を入れたる握飯焼餅等は腐敗早きものなり。

ハ、其他の食物として用意すべきものは、

1. スルメ・鯉節・蒸田作等の内を少しく持つ事。

2. 糖分としては氷砂糖・砂糖・金平糖の内を少しく持つ事。

3. 塩気として味噌・味噌漬の内を少しく持つ事。

4. 水筒は各人必ず一個を持つ事、ひきごにても瓶にてもよし。

3. 其他の携帯品

イ、手拭・鼻紙・紐一筋を用意する事。

ロ、手帳・鉛筆・小刀を用意する事。

ハ、薬品として宝丹・仁丹等の持薬を用意する事。

ニ、学校にて分ちたる地図を持つ事。

一、学校にて準備

1. 鈴を二個用意する事。

2. 提灯二張、ローソク十挺、マッチ十個を用意すること。

3. 仁丹・宝丹・龍胆末・繻帶・ヨードホルムを用意する事。

4. 鎌一挺用意する事、手斧一挺用意の事。

5. 細引(長さ二十間)を一筋用意の事。

6. 案内者を一人雇入るゝ事。

一、注意

萱に到着、茲にて一休。第一回の食事をなす。水筒に水をつめしむ。

二、午前九時半内ノ萱を出発し将棋頭に向ふ。内ノ萱より将棋頭に至るの行程約三里半、中途十数回休憩して、午後三時将棋頭に到着の予定、中途清水ある所にて水を充分求めしめ、少しく登りて黒木の内に於て、第二回の食事なさしむ。

三、午後三時将棋頭を発して伊那小屋に向ふ。此間の行程約二里、午後五時伊那小屋に到着の予定、中途、天水岩・濃ヶ池・駒飼ノ池等にて休憩。

四、午後五時よりして伊那小屋に宿營の準備をなす。同夜は茲に宿す。第三回の食事を終ふ。

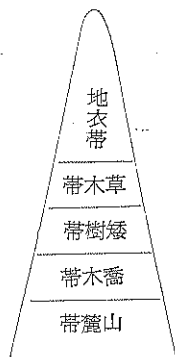
五、翌日午前九時迄の間に於て眺望觀察・植物採集・山上講話をなし、午前九時出発。将棋頭に向ふ。第四回の食事を終ふ。天水岩にて水をつめしむ。伊那小屋より将棋頭に至る行程約二里、此度は馬の脊を経て、午前十時将棋頭に到着の予定。

六、午前十時将棋頭を発して西春近村小出に向ふ。此行程約三里、午後二時小出着の予定。此の間数回休憩中途にて第五回の食事をなす。権現の神社の所にては眺望休憩する事。

七、午後二時小出出発帰校す。此間の行程約三里、午後六時帰校解散の予定。

2. 講話要項

- 一、地理的觀察眺望を实地に就き地図と対照して講話すること
- 二、植物の垂直的分布に就きての講話を為す。



三、高山植物につきては实地につきて教授す。

高山植物は水分を得るに困難にて、常に強風に当り又烈しき日光に晒され、昼は温度著しく昇り、夜は急降するを以て葉は大抵此の激変に堪ふるを要す、されば多肉にして、毛を被り、堅く強く、組織よく発達し、幹短くして、葉は叢生せず、幹は往々平伏す。根は之に反して、比較的太く長くして、植物体を支持す故に採集にも又困難なり。

四、神靈に接すべき事

諸子の現在の状態（山上に於ける）之れ神靈に接したるものなり、天地の偉大壯嚴に感応して己が精神より一切の邪念靈霧を一掃し、本心に帰へり良心の光明を現はし、至誠独慎、居形の状態を持する之れ靈に接したる状態なり。正直の頭に神宿る。至誠神の如し。

心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん。

は仕度をして再び登校した。昔附屬訓導時代に着た縁付の黒羅沙の洋服に、脚絆・草鞋を着け、蓑蓑を着て表裏の大きなのを被り、右肩より左腕にズツクの袋に何やら一杯つめたのをかけ、夫れとタスキ掛けに昨日篤志家より借り入れた双眼鏡をかけ、杖をついて中々勇ましい扮装であった。来るや否や小使室へ行って、小使に鋸を出せといふたが無かった。夫れでは鈍でよいといふて持って出た。これ山上にて這松を切つて薪とするために用意したのである。だんだん時も過ぎ出発の予定の五時が来たが予定の人員丈集らない、暫くまって五時半に至り勢揃が出来た。引率者三名生徒二十五名同窓会員九名である。此頃駒ヶ岳方面の空模様を見たるに薄雲は山の上部を覆つて居るけれども、空には細長き青空を認め、後刻晴れ渡るべきを予想された。五時四十分校庭に整列、人員の点検、携帶準備品及各自の着装に就きて、充分の検査をして、左の隊形で出発した。

（先頭）征矢教員……生徒……校長……生徒……同窓会員……清水教員（後尾）

道を春日街道にそって、午前七時雨雲輪村大泉に着いた。此間約一里北端の公園に於て第一回の休息をした。此間に着装に故障あるものは直さしめ、特に草鞋の穿き方に就きて注意を与へた。此頃は空は南北に細長く開き日の影を現はし、やがて快晴にもならんとする模様であった。涼しい内に成るべく多く行こうといふので十五分間許休んで出発した。大芝原を横ぎって、西麓輪村大萱の西部を經

見る人もなき山かげの桜花ざりとて色香かわりやはする。此の良心此の至誠、君に対しては忠となりて現はれ、親に対しては孝となりて現はれ、兄弟に対しては友として現はれ、朋友に対しては信となりて現はる。一切の道徳は皆之れ此の良心、此の至誠の発現たるなり。古より修業者が常に高山に登りたるは此の本心を得んが為めなり。諸子は今日此の本心、此の道心を實現したり。下山せる後も、常に此の心を想ひ起しては益々至誠の純なる域に達せん事を望むなり。

二十六日登山当日

校長は午前三時頃起きて、直に天候を見た。西より南の空に渡つて白雲を認めたが、北より東に渡りては青空で、雨模様とは思へない。後に至らば晴れるだろうと思ふた。然し児童の様子はどうかと思つてねまきのままで、学校へ来て見た。其時既に二名の児童は甲斐／＼しい扮装で来て居った。校長は「やアよく早く来たナア」と云ふて復空を見たが天気はよささうである。其中に続いて児童が元氣よく集つて来る。そこで校長は、家に帰つて仕度をして来やうと帰ろうとしたら、其処へ来た児童が「先生山へ登らんかね」と大きな声でゆう。校長は「登るから皆待つて居れ」というて行つた。本朝登山の便宜の為に、昨夜学校に泊つて居った清水教員は、其校長の声に驚かされて、はね起きて見たらもう校長は門を出て行く処であつた。清水教員は取急いで仕度をして居ると、四時頃には校長で、学校附近の林中に於て第二回の休息をした。此行程約一里、今回は体を十分休ませる様に、装具を全部取除かせ食事をさせた。時に午前八時で此頃は空も余程晴れて、暑かったため、殊に林中日影涼しき処に休ませた。此休息三十分間許りにして出発、梨ノ木・中条を経て、午前九時伊那町平沢に着いた。小沢橋附近にて小休止をなし、横山を通過して、内ノ萱発電所に到着した。時は午前十時四十分であつた。此間暑さ随分烈しかったため時に帽を脱がしめ、風を通はす事等に注意をさせた。

正午迄休息の予定で、発電所西の芝原に於て大休息をした。体を十分休ませ、食事也十分取らせ各自携帶の水筒に清水を補充させた。児童の元氣は頗る旺盛で一名のよわった者もなかった。此休息中山の雲静かに下り雨が降り出したので、さてはと思ひ空をながめて心配したが、僅か数滴にして忽ち霽れた。天は吾等一行に幸して呉れるものと一同喜び勇んで、予定の通り正午仕度を整へ各個につき検査を為し、特に身体の異状の有無を検しこれより愈々山地急傾斜なればとて、山地行進上の注意を与へ既定の隊形を以て発足した。

登る事約十町又微雨に襲はれたが忽ちにして霽れた。其中に喬木帯の手前なる清水の有る処に着いた。依て休息して水の補充をした。山麓より此地迄凡そ一里位である。再び発足して数町登った処で一行数名下り来るに会ひ、赤羽校長は早速天気模様を尋ねたら「昨夜は少し降ったが今朝は全く霽れた」との事であつた。これ迄は一

行意気頗る盛なれども校長はじめ引率者の胸につかへて居る心配は天氣の事であつた。然るに今茲に此返事を聞いたので大に安心した。是より尚隊形を乱さざる様、時々注意を与へて数回の休止をなし、全員無事行者岩の東の山嶺に出た。此処で暫らく休息し例の通り、着装上に就き注意した。此時雲は各高峯を覆ひ、遠望は出来ぬけれども微風だになく極めて静かであつた。

これより予定の通り濃ヶ池に向ひ午後四時に到着した。此附近は霧が非常に多く、岩陰には雪があつて頗る陰氣を感じた。予定の通り休息し隊を解いて植物採集をした。何れも元氣少しも衰へず我先きにと駆け廻つて採集した。斯くする事約二十分、再び隊形を整へ伊那小屋に向つた。これよりは道最も峻嶒で歩行は随分困難であつた。時々小休止をなしつゝ、駒飼の池に至るや天候一変し、俄然黒雲捲き来て冷たき谷風が襲つて来た。

此時に至つては稍々疲労を感じずる者も見えたが、急ぎて伊那小屋にたどり付かんと、勇氣を鼓しつゝ登つて午後六時小屋に到着した。予定より一時間後れた。これ出発に於て三十分後れ、途中に於て三十分の艱難を生じたのである。

伊那小屋は、予て腐朽し且破壊された事は承知して居つたが、材木類は予想より僅かで角材十数本のみ、誰か数人が之を利用して宿つた形跡がある丈である。然し今は躊躇すべき時でない。全員直に輕装して空腹を感じたるものには急ぎ食事せしめ二班に編制し一班

のみ一同黙して声なく、遂に風間の疲労と寒威のため眠りに入らんとする者が出来た。校長は此に至り、令して二三人宛相擁して暖をとると共に互に制して眠らないやう警戒せしめた。然して相交らず焚火に苦心して居る。其側に居つた古屋なる児童は、最も衰弱の色を現はし「先生眠むくて困る」といふ。校長は火を吹きつゝ、「古屋眠るな元氣出せ明朝はよい天氣になるぞ」と古屋を励ましつゝ居る中に、遂に夜が明けた。此時最早火を焚く唯一の根本材料たる蠟燭も尽きた、マッチも尽きた。天明けなば風息まんと希望の綱も切れ果て夜は明けたれども風も止まぬ、否益々暴風は猛りくるつて僅に造つた小屋の屋根は固より、一同の体迄も一撃に奈落の底に運ばんず勢である。然かも寒威は益々加はり意氣愈消沈する。全員只黙然として居るのみである。此に於て校長は熱々外圍の状態を眺め此位置の頗る危険なるを認め、協議の上木曾小屋を探索し、之に収容せんとしふ事に決し、校長及清水教員の二人其任に當る事となり、直に結束して出かけた。出るは出たが風は強く、礫は雨と共に打ちつけ、目も口もあかれず加ふるに風強くして立行する事が出来ない。四つ道となつて進んだ。処が四面霧に鎖された上四つ道になつて居るので如何とも方角を認める事が出来ない。辛じて三四丁進んで見たが到底木曾小屋に行き得る見込が付かない、二人は茲に断念して岩陰依ひに辛うじて、この小屋に帰つた。時に午前七時であつた。小屋の中に居つたものは誰れも黙したまふ、木曾の小屋では

は校長及清水教員指揮の下に小屋の改造に着手し、一班は征矢訓導指揮の下に薪の採集に着手した。児童の元氣は頗る旺盛で、其の働は実に目醒しきものであつた。訓育上目的とする処の至誠奮闘的自治と協同の精神は別に左程の注意もなく自ら遺憾なく發揮された。

約四五十分間にして予定の作業を完了し小屋は三尺許の高さの石垣に材木を斜めに渡し、其上に這松を置き更に各自の蓑蘆合羽を覆ひ屋根を葺き、石垣に接して屋根に空窓様の口を設けた。其中は辛うして三十七名の一行を入るに足りた。此作業を終る頃は天既に暗く風漸く烈しきを加へ、雨も少し降り出し寒氣頗る加はつて来た。依て急速児童を小屋内に入らしめ携帯の防寒衣(多くは冬シャツ)を着せしめ食事をすまし休息させた。斯くて刻一刻風は愈々猛烈に、雨も亦烈しくなつて来た。急造小屋の事として雨は漏る衣はぬれる寒氣は益々加はつて、何れも疑懼の感に打たれて来た。此に於て校長始め引率者は児童を励ますと共に、よく暖を取らせんと、焚火に苦心するけれども中々燃えない。無理もない、濡れた古木と青い這松である。加ふるに其上へ雨が落ちる、校長は身の疲れも忘れて苦心し、予て用意せる蠟燭数丁に点火し其上に材料を置いたが、僅かにむし焼にする迄である。烟くて目も口もあけぬ、又息も出来ぬ、遂に愛蔵の手帳を出し、其紙をむしつて、附木の代用とし其手帳を團扇に代へ、且吹き且あほり如何にもして寒氣の襲来に抗せんとした。

此時室内には中央に、提灯が一つ吊され、煙の中を僅かに照せる火もたけるだらう、風に吹き飛ばされる事もなからうなどと想像して其席を待つて居つた。然るに今報告に接したので室内は大に不安の空氣に満たされた。

此に於て再び策を講じて、校長及征矢教員の二人が、内の萱迄下山し屋根を覆ふべき材料・食料・着替への衣類を整へ、人夫を雇ふて此小屋に運搬し、嵐の止む迄此処に留らうとゆう事に決し、後事を清水教員に依頼し「まア君出来る限り注意して僕等が人夫を連れて来る迄維持して呉れ給へ」と言ひ残して発足した。此時二人と共に、下りたいといふ児童の切なる希望が有つたが其危険を諭して止まらせた。そこで校長・征矢教員の二人は相も交らぬ烈しい嵐の中をでかけて思はず再三あらこちら岩に吹き付けられたが幸にも道の両側に這松や岩などが有るので吹きまくられずに進む事が出来た。斯くて七八丁下つて、駒飼の池迄下つた処が、山上に比べては余程静かである。そこで校長は思ふ様此分ならば児童にも下れぬ事はあるまじ、余等下山して所用の品を整へて登るには、少くとも八九時間を要し、夕刻ならでは来られまい。今日一日あの位置にて安全に生命が保てるかどうかとゆう事はささる疑問である。そしてみれば此際十分なる注意を与へて、しっかり連絡を取つて、下るが安全であろうと、征矢教員に相談し、茲に再び議を改め、小屋に帰つて来た。此時は午前七時半頃である。帰つて小屋の口に出た処が何だか中が騒がしい。何事かと思つて急いではいつて見ると、清

水教員は古屋時松を抱いて宝丹を口に入れて居る処である。今より十分許り前に俄然気絶したといふ。古屋は目を見開き歯を喰ひしはって居る。此刹那に於ける校長の心事や如何に「ア、困ったナア」と言ひつゝ共に看護して顔に水をかける脊中を打つ、大きな声で、古屋くと呼ぶけれども返事がない。そこで体を毛布で包みよりあつて手足を摩擦したが、更に反応がない。人工呼吸もやって見たが駄目だ。脈は刻一刻と細く、且遠くなるのみである一同、只々不安の面持にて、黙然として居る。かくて古屋看護に苦心する事約一時間、古屋は顔色蒼白に、目を開いたまゝ、遂に他界の人となった。不安の念に打たれつゝ寒気に襲はれ人心地もなく居る一同は、目のあたり此悲慘の古屋の最後を見たので、一同は既に死の運命が目の前に迫れる如く感じ、云ひしれぬ恐怖の念に打れた。此時校長の顔色土の如く、古屋を抱いたまゝ一時無言であつた。然し、かくてあるべきにあらねば、いざ急ぎ下山の準備をせよ、と用意させた。用意といふて多く改むる迄もなく小荷物を腰に付け屋根のゴザを取つて着けた。中に一人「僕のゴザがない」といふ声が聞えた。征矢訓導は「誰のでもよい早く付けよ」といふて順次小屋を出した。最後に校長征矢教員有賀同窓会員の三人残つた。さあ古屋をどういふ風に負うて行かうかと相談した所が此の風では一人身さへ危険多きに人を負ふては如何とも行くすべなかるべし。むごたらしけれども一人此に残して行かうと其場にねかした。此時古屋の紺紺の袴に、団は一刻も早く喬木帯へ入れやうと思ふて先頭者に行者岳への分岐点の処を注意して進行させた。

是よりは山嶺伝いの道故、木曾方面から吹き上げる風は、頗る猛烈で一行の生命も今か今かと思ふ事も度々あつた。幾度か吹き飛ばされんとして、隊伍も乱れ、三三五々岩伝ひに進んだ。漸く斯くて此一団は喬木帯の安全帯へ入った。これよりは危険の所もなしと思つた故征矢教員は、一同に山麓の社附近で待合ふやうにと注意してやつて後一人を踏み止まつた。一息して後団の様子を見やうと思つて居る処へ、浅井なる一青年が伝令としてかけ下つて来て校長よりの命令を伝へた。「今濃ヶ池の処で復々一人斃れた、猶外に衰弱者があつて背負て下りつゝあるから征矢先生は急ぎて内の萱に下り、人夫六七名を雇つてよこして呉れる様に」との事であつた。

之を聞いた征矢教員は、それは容易ならぬ事、これ先鋒の任務なりと韋太天の如く内の萱に向つて馳せ下つた。先ず路傍の家に飛びこみ山上の様子を語り応援を求めた。此時征矢教員は過度の疲労の爲め十分に語るを得ず漸く意を通ずる事を得た。是を聞いた老人は直に諾して附近を語らひ僅か三十分許りの間に一団応援隊を組織して発足した時は午後四時頃であつた。先鋒隊は斯くして一同無事に内の萱に着いた。

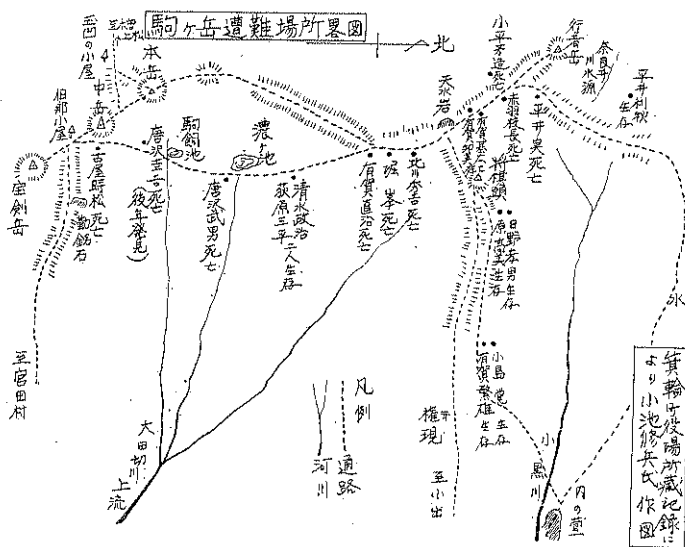
後尾の方は先鋒団と連絡を絶ちたるのみならず殆んど各人の連絡を失ひ別れ／＼になった。蓋し落伍した衰弱者である。最後尾に居

黒の三尺をしめ、ずつのかばんをかけ、着たゴザを下に上向にねかした。いざ去らんとして、三人共に只涙あるのみであつた。校長は古屋が死んだとはいへ、こゝ迄連れて来たものの、独りおいて去るにどうしても忍びなんだと見へ、「僕は古屋を見て茲に居るから君等は生徒を連れ早く避難して呉れ玉へ」といはれた。此時征矢教員は涙を振つて「そうだが先生古屋はもう死んでしまつた。死んだ一人よりは他の大勢の生命が大事だ。一所に下りて下されば困る」といふと、校長は「そうさなあ」と考える処あつたように、古屋を見返りつゝ小屋を出た。此時風は愈猛烈に雨は突然水の様に砂と共に顔をうち、吹きすさむ風は岩に激してゴウ／＼と鳴り響く。全く此世の沙汰とは思へない有様である。愈進み出した。先頭は征矢教員その後が生徒及同窓会員、後尾が校長清水教員及同窓会員中屈強者二名であつた。連絡を絶えぬやう注意したと思ふ様に全員に通じない。各真向に風に向へば呼吸が出来ないから、両手で帽子或はゴザを持って鼻を覆つて呼吸を助けて進行を始めた。此時が午前九時頃である。斯くして駒飼の池附近よりは路が最も峻嶒で一人ならびでなくては進む事が出来ない。勢ひ隊形が漸次長くなる。征矢教員は後方の様子はどうかと思ふてうつつ向したる儘、後方を呼びつゝ進んで濃ヶ池を越へて小出道の分岐点の処で踏み止まつて来るものを纏めた。十八人は来たが後は途切れて来ない。蓋し後は後で一団になつたであらう、風は相変らず強い、ぐず／＼しては居られぬ、兎も角も此一

りし清水教員は小屋を出立して約十丁許りの処迄来た時、萩原三平なる児童が「先生目疊がして」と叫んで倒れてしまつた。急ぎ抱き起して手を引きつゝ歩んだが歩行が頗る困難の様子故背負ひて辛じて濃ヶ池迄来た。一行は皆通過した後で唐沢武男といふ児童が斃れて居つて駆け寄つて見たが脈が全く絶へて居り体も全く冷えて居る。如何とも仕様がなない。多分校長であらう側によつて色々と介抱した形跡がある。涙を以て別れて濃ヶ池を越へて少し来た所がこはそも如何に三名の児童(有賀直治・北川秀吉・堀峯)が殆んど相並んで、上向きになつて倒れておる。其三人目の児童の側に校長がよつて介抱して居る。此時も暴風が雨と砂とを矢の如くに射り付ける。清水教員は精力全く尽き一步も進む事が出来なくなつた。附近を見たら、僅かに一二人を入られる岩蔭があつた。そこで萩原三平を連れて其岩蔭に身を潜めた。そして萩原をマントに包んだ。其時校長に「先生も此岩蔭にはいりませんか」といったが「僕はそうしては居られん、此の先に行く児童を助けねばならぬ。君其児を頼む」と云ひ残して駆け出した。ア、八千余尺の山上に、然かも四面雲霧にとざされ、嵐はくるひ廻り、今にも山も崩れはつるかと思ふばかりに響き渡る其中に、只二人余は我命のある限りは此児を救はざるべからず、死ぬも生くるも、もろともには此時清水教員の独り言せし処であつた。綿の如く疲れてたる此心身にはて眠るべし。眠らば萬事休す、夢ながら黄泉の人たるは明かだと思つて、萩原に「元氣よくせ

よ」「眠るな」と揺すりつゝ励ましつゝ折々大声を挙げて援けを求めて時の移るを待つて居た。九時頃、風も雨も漸く静まった。十時半頃には全く晴れた。然し体も心も最早疲れ果てゝどうする力もなない。何となるとも茲に一夜を明かすの外なしと覚悟をきめた。斯くて其儘何時知らず眠に入つた。翌朝目が覚めた時に日は東天に輝いてゐた。さて下らんとすれど氣は唯遠々しく足はたゆ／＼して意の如くならない。荻原の手を引きつゝ静かに下りつゝあつた処へ、援護隊がかつつけた。

校長は清水教員に別れて平井を負ひ、早く喬木帯に入つて此児を救ひたしと將棋頭の分岐点より少し下るや有賀基広（同窓会員二十四歳）が弟国美（十五歳）を細引もて負ひたる儘仰向に打ち倒れて居た。山嶺に於て一人の古屋の死を見てさへ、既に己が安危も忘れ、其破れ小屋に共に留まらんと考へた情あるこの校長、身を潛まするに、よき位置を後にして僕はそうしては居られぬ先の児童を助けねばならぬと、烈風暴雨の中に突進した、責任の感に満された此の校長が、五人の死に接し、今又兄弟共に斃れた現状に接したのである。はねよつて脈もみたらう、呼んでも見たらう。然し身には子供を負んで居る、少しも早く風雨を避けねばならぬ、事茲に至つては涙もつきたであらう、声もかれたであらう。然かも勇を鼓して、更に飛出して數丁下つて大きな岩を越へんとする時遂に人事不省となつて倒れたであらう。喬木帯を去る四五丁の処に、仰向に右手を上に見上げ、



一五

んで居る。君は殆んど二晝夜に亘って一睡もせず。最善をつくして奮闘した。君が体力を知る者は、如何にして此大活動が出来たかと怪まずには居られない。然かも尚ほ足らざるを感じ責任の叫びを放って逝かれた。君が昨夜来一晝夜間の活動は全く児童に対する赤誠

左手を股につけ、足を投出し眼も口も開いたまゝ苦しかりし様子もなく斃れて居った。負はれた児童(平井)は校長が斃れたので寄る辺を失った。然かも力がない。苦しみながら更に三四丁下つて終に倒れた様である。是より先征矢教員の報告によつて、内の蒐搜索隊十数名は登山した。其最先鋒唐木喜高氏は夕刻六時半頃平井の位置に着き、障つてみたが、既に冷へて全く見込がない。更に駈け上つて赤羽校長の処に付き、胸に手をあてゝ見た処が幾分脈の気味がある。これは見込があると、手を持つて引き起し「これから助けるからしつかりしなさい」と大声で呼び居ると、救援者の一人(唐沢亀吉)が飛びつけ後より校長を抱いた。其時力なき微かな声で「おれ一人だあ」の一語を發した。此位置は、尚風も雨も劇しくて、援護者も共に斃れんぞ有様故、校長を背で背負ひ三丁許り下つて安全の位置に下ろし、二人で背をさすったり、肩を揉んだりして看護した。此時「ア、うれしい」の隻語を残して、眠るが如く遂に逝かれた。

ア、校長の「おれ蜀りだあ」「うれしい」の隻語、これ氏が幽明境を越えんとするに當つて放つた最後の叫びである。「おれ独りだあ」其言簡單なれども意は自ら明である。

最早死者数人を目の当り見た。死する者「おれ一人」と言ふ謂れない。助かるもの「おれ一人」と思ふ筈は尚更ない。即ち此失敗の責任は「おれ一人だ」の意である事は明である。

赤羽校長が特に息の絶へんとする際に當つて尙自己の責任を叫

と、恥に対する責任の感より出たもので、他に一点の私もない。其崇高なる、誠に神の境界である。

尚最後に「うれしい」の一語は救助者に対する感謝の表示に外ならぬ。一時も早く救護隊を送れとは征矢教員に下した命令である。今其の救護者に逢ったのだ。感謝の辞ある君として必然の事である。

結論

以上遭難當時の概要を叙した。吾人は今回の事が將來の登山者旅行者の參考に資すべきもの極めて多きを信ずる。又赤羽校長の至誠奮闘、人事を盡し斃るに當つて尚責任の叫びを發せる、其崇高なる心事は吾人が深く敬慕して止まぬ処である。蓋し君が靈は未來永劫其實を負んで駒ヶ岳山上に横はるであらう。

昔文化年間寂本行者が駒ヶ岳の秀靈に感じ、山を開きて茲に一百
年、然かも登山者未だ甚だ多からず、今回の事により、急に世人の
注意を喚起し、登山道路の開鑿小屋の建設等著々進行を始めた。蓋
し山靈邦家将来の爲め、涙を振って犠牲を出したかの感なき能はず
である。